

令和 2 年 7 月 12 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16K00700

研究課題名（和文）口述資料採録にもとづく戦後日本のインタストリアルデザイン文化調査法の確立

研究課題名（英文）Developing Historical Study Using Oral History to Explore Japanese Post-war Industrial Design

研究代表者

樋口 孝之（Higuchi, Takayuki）

千葉大学・大学院工学研究院・准教授

研究者番号：70375608

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦後のインダストリアルデザイン文化について、社会背景、デザイン開発、製品の実体、ユーザの受容など、文書資料調査と口述資料採録調査を連関させて調べていく手法を構築していく作業を行なった。関連する調査方法論について国内外の活動を調査し海外研究者との討議を行い、事例研究として口述資料採録調査を実施し実施過程で確認された課題を検証した。結果として、従来の整えられたデザイン史定説に対して個々の口述資料が有する価値の再認識、口述資料採録を行う研究者の立ち位置が調査実施と考察に影響を与えること、高齢者インフォーマントに対して聞き取り調査を進める際の課題と要件をあきらかとした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代デザイン史におけるオーラルヒストリー研究推進にあたり、口述資料収集のための課題を抽出し、本研究で実施した調査過程から得られた知見としての実施方針を提示した。従来の整えられたデザイン史定説に対して個々の口述資料が有する価値を再認識し、デザイン史を複雑に関連して行われてきたデザイン活動の複合体として取り扱い、個々の証言からデザイン史を再構築・改訂することへの視座と手法の提示となった。

研究成果の概要（英文）：The research aim is to develop a method of historical investigations by conjoining literature research and oral history for exploring the cultures of industrial design in Japanese post-war period, which were made up of the social situation, design development, materiality of products, and users acceptance. We investigated related methodologies and discussed with overseas researchers who strenuously studied in design history. And, we conducted some researches using oral history on Japanese product design cases in the 1960s and 1970s and investigated the features and problems observed in those research process. As a result, we confirmed the value on a specific resource from a designer comparing with the established design history, the standpoint of a researcher affecting to the implementation and consequences of oral history, and problems and requirements to implement oral history to an elderly informant.

研究分野：デザイン

キーワード：デザイン史 インダストリアルデザイン 工業意匠 オーラルヒストリー インハウスデザイン

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

戦後、日本のインダストリアルデザインは家庭電化、映像音響、光学、情報電子、輸送など幅広い製品領域においてすぐれて発達してきた。企業内デザイン部門(インハウスデザイン)は戦前に一部に存在し、1950年代より上記した製造業において設立が進んだ。日本のインダストリアルデザインの発展に企業内デザイナーが果たした功績は大きい。しかしながら、従来、美術史に類して進められるデザイン史研究はデザインを造形芸術としてとらえて作品の造形美や作者の表現意図などの考察に主眼をおく傾向が強く、企業内デザイン部門の活動を対象とした研究は数少ない。また、20世紀に企業活動では担当デザイナー個人名を公表することは少なかったことも活動の実態を探ることを難しくしている。

近年、欧米やアジアにおいてデザインミュージアムの新設や施設更新が行われている。研究代表者らは、インダストリアルデザインを対象とするミュージアム展示においては、モノ(制作物)だけをアーカイブして鑑賞に供するにとどめず、一つの製品あるいは製品群のインダストリアルデザイン文化を伝えるものとして、制作物(製品)、制作行為(デザイン開発)、人びとの受容(製品の利用)をとりあげ、さらに、社会的コンテクストのもとでの製品の意味を読み取るために、社会情勢や情報流通(製品広告やメディア記事)をとりあげることが必要と考えた。

2010年代となった現在、1960年代～1970年代当時の事情についてデザイン関係者から聞き出し資料化することが喫緊の課題となっており、インダストリアルデザイン文化調査における口述資料採録を進めるためのアプローチを確立していくことが求められている。

2. 研究の目的

本研究は、口述資料を活用したインダストリアルデザイン文化史研究の伸展に向けて、口述資料収集のための有効な方法論、資料の分析と記述の方法を導出することを目的とする。あわせて、文書資料と口述資料を連関させた調査を実施し、その検証を通してインダストリアルデザイン文化の解釈を深耕する有効な方法論を導出することを目指す。事例研究として製品領域を1960年代～1970年代前半の音響製品に設定し、対象製品のデザイン開発の背景と事情を明らかにする。

3. 研究の方法

戦後のインダストリアルデザイン文化について社会背景、デザイン開発、製品の実体、ユーザの受容など、多角度から考察する枠組みを構築することをめざして、文書資料と口述資料を相互に連関させる調査法を組み立て実施した。調査対象製品について、はじめに文書資料調査、必要に応じ現物調査を行い、続いて口述採録調査を実施した。また、製品プロモーションの様相と製品利用状況について調査を実施した。それらの調査結果の分析を通して戦後インダストリアルデザイン文化調査の有効な方法論の構築を進めた。

(1)戦後のインダストリアルデザイン文化調査における方法論の構築:インダストリアルデザインという視覚文化に関わる対象に適応させるよう、文書資料から得られた情報を口述資料採録に連関させる調査法の構築を行なった。そのため、他の領域で進展するオーラルヒストリー研究の方法論を整理したうえで、インダストリアルデザイン活動の性質に適応させた口述資料採録の方法を設定した。海外研究者との討議、工芸財団資料の確認、企業における歴史館の調査、デザインミュージアムにおけるコンテンツ参考事例の調査を実施した。

(2)新領域製品の展開の確認:社会生活の要求と技術発展の段階に呼応して新しいカテゴリーを設定する製品が出現し市場が形成されて同カテゴリーの製品が展開されるという状況と過程の脈絡においてデザイン開発を理解する方法を探るため、1960年代から1970年前後のラジオほかの音響機器を対象に事例調査を試みた。カタログ、販売資料、社史資料等を確認し、カテゴリーとしての製品展開の整理を行った。

(3)対象製品の文書資料調査ならびに現物調査:対象とした音響製品について、企業技術報告、「工芸ニュース」誌、グッドデザイン商品選定制度等の文献資料を調査し、調査対象製品のデザイン開発に関する情報を抽出し口述資料採録調査時の提示資料として整理した。現物の確認がとれる対象製品について現物調査を実施した。

(4)口述資料採録:デザイン開発過程についての採録調査、ならびに社会背景とユーザの受容について口述資料の採録調査を実施した。調査方式は、文書調査で得られた情報とインフォーマントの事情に対処して、個人へのインタビュー調査あるいは談話形式の調査ワークショップとして実施した。

(5)製品プロモーションと製品利用状況調査:日本の工業製品の多くが国内外を市場とした製品であり、事例としたラジオほか音響機器について海外の状況を調べるため、日本の資料ならびに主要な輸出市場として米国の資料を調査した。米国のデザイン文化研究者より対象資料と調査方法の助言を得て実施した。

(6)調査結果の総合考察:戦後インダストリアルデザイン文化について、口述資料採録を行うための有効な方法論ならびに文書資料調査と口述資料採録調査を連関させる方法論の導出を試みた。研究成果をもとに調査の発展推進に向けて、デザイン関係組織や研究者とアーカイブ構築に向けての連携と分担を探った。

4. 研究成果

インダストリアルデザインに関わるオーラルヒストリー調査ならびに現代史研究のアプローチ方法について国内外の状況を調査した。日本国内では大阪中之島美術館に向けたインダストリアルデザイン・アーカイブズ研究プロジェクトの活動では「記録」(製品情報)と「記憶」(オーラルヒストリー)の集積を実施している。同活動を考察し、本研究の視座からは、製品を単体としての作品として捉えることから複数製品の連関やデザイナー・組織の脈絡を調査し考察することへの発展、また美術史研究者の議論に加えて企業関係者の関与を増やすことの重要性を課題として提示する。海外調査において、アールト大学(フィンランド)Korvenmaa, P., Julier, G.との討議においては、Korvenmaaは関係者同志が近い関係にあるデザインコミュニティの構成員として参与観察というべき情報収集を行っていることが確認できた。王立芸術院(英国)Teasley, S.との討議からはオーラルヒストリー研究を推進する観点ならびに1980年代~1990年代の出来事の調査を開始する時期になっていることの示唆を得た。M+美術館(香港)のShirley, S., Wong, J., Yokoyama, I.との討議からデザインミュージアムにおけるアーカイブの観点からの資料の必要を確認し、口述資料のテキスト化に加えて美術館展示としては音声や動画を資料として活用することの有用性が示された。パーソンズニュースクール大学(米国)Traganou, J., Mitrasinovic, M.との討議からは、米国における現代デザイン史研究とオーラルヒストリー調査の取り組みの状況、文書資料の確認法、日本の現代デザイン研究における活動テーマの示唆を得た。V&A美術館(英国)Sandino, L.からは著作ならびにオンライン情報を通じた示唆を受け、視覚芸術に対する口述採録実施例の把握を行った。テキサス大学(米国)Meikle, J.からは、時代が近い現代デザイン記述においても定説とされる言説の信憑が疑わしいものが少なくないことから学術的に信頼できるかたちで考証した記述が求められていることの示唆を得た。

文書資料と口述資料を連関させた調査、口述資料収集のための有効な方法論の確立に向けた検討は、他の領域で進展するオーラルヒストリー研究の方法論を整理したうえで、口述採録を実施過程で確認された課題を検証し、研究倫理を満たしたうえで高齢者であるインフォーマント調査に配慮した同意確認ならびに個人情報保護を遵守した口述採録の手続きを構成した。高齢者インフォーマントにとって、整備された文書による諸項目確認は難解で煩雑であること、同意にチェックを入れて署名を求めることは返って警戒心を生じさせかねないなどの難があることがわかり、開始時に音声録音の許可を得たうえで確認事項の概要文書を提示しながら口頭で平易に説明して了承を得るなどの手続きを構成した。資料を準備し展開に応じて提示して行う記憶確認作業は、採録時間の制約と高齢者インフォーマントの語りの調子を崩しかねないことから容易ではなかった。また、収集した資料利用に関する課題を導出し、本研究実施の枠組み内で試行し対応した経緯を経て、社会的アーカイブとしての課題を導出した。それらは、口述採録時の内容確認の進め方、資料の所在の公開ならびにアクセスと利用の範囲、利用成果発表時の許諾の考え方、アーカイブとして保管システムと継承管理などである。採録資料は共通利用資料となりうるものであり、倫理条件を満たしつつも手続きを厳格化しすぎない枠組みが必要となる。また、個人の活動としての情報と所属組織の活動としての情報についての観点を整理する必要がわかった。口述採録実施時にインフォーマントよりオフレコとのことわりで情報提供があり、それらの多くは興味深い内容であり実際の出来事として史的価値が高い。政治史・政策史の口述採録資料において後世の考証に供することの社会重要性に比べ、デザイン史において情報の社会重要性をどのように判断していくか、時間がどれだけ経過したら公開してよいかなど、個々の研究や出来事についてはインフォーマントの承諾を中心に所属組織を考慮したうえでの倫理的判断を行う事項であり、今後デザイン史のオーラルヒストリー研究の発展に向けては個々の研究の枠組み内ではない広い理解の形成が必要となる。上述した観点などをデザイン史においてオーラルヒストリー研究の口述資料収集のための課題を抽出し本研究で実施した調査過程において手法を改訂した。

事例研究として製品領域を1960年代~1970年代前半の音響製品に設定し調査を行う計画としており、音響製品の文献資料調査ならびに現物調査を推進するとともに、口述採録の実施検証を進めるために住設機器、自動車の他領域の製品や製品科学研究所の活動について実施を行った。ラジオを主とする音響製品については、国内の各種資料や米国の技術雑誌資料など幅広い文書資料確認から、当時の産業構造における製品展開やデザインの関与について考証を行った。一方、口述を承諾いただいた音響製品のインフォーマント予定者において個人事情から辞退があり、口述採録は助成期間内には実施ができなかった。住設機器、自動車のデザイン活動についての口述採録からは実践者の発言として貴重な証言を得ることができた。調査実施前には文書資料の整理情報を手引きに断片としての口述資料を収集する構図を設定したが、インフォーマントが強記であって的確な脈絡で語った場合に、その情報を手引きにして文書資料の確認を進める手法が有効であると示唆を得た。助成期間の終盤に計画をしていた調査は、時期が感染症拡大防止の情勢となり実施できなかった。本助成期間で得られた知見を生かし、継続した研究で調査を進め、総合考察を行ってとりまとめ成果発表を行うものとする。

本研究を通して、海外のデザイン史研究者との討議を経て、オーラルヒストリーを含めた現代デザイン史研究を推進するための連携関係を深めることができた。また、インフォーマントとなりうるデザイン関係者への接触を進める手立てを整えた。継続する研究において、デザイン組織との連携ならびに研究者連携と分担を行う調査を推進する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Takayuki Higuchi, edited by Haruhiko Fujita and Christine Guth	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Bloomsbury	5. 総ページ数 576
3. 書名 'Solution and service design in Japan', Encyclopedia of East Asian Design	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡邊 慎二 (Watanabe Shinji) (40770095)	千葉大学・大学院工学研究院・教授 (12501)	
研究分担者	小野 健太 (Ono Kenta) (70361409)	千葉大学・大学院工学研究院・准教授 (12501)	